新見公立大学紀要　第37巻
pp. 161－165, 2016

報告

看護学生の開発途上国での国際交流活動と学生の学び

－2015年度 カンボジア・スタディツアー報告－

山本　智恵子*・古城　幸子

国際交流活動

（2016年11月30日受理）

2015年度の国際交流・国際貢献活動として「カンボジア・スタディツアー」を実施した。研修前に学内活動として，現地小学校で不足している文房具の寄付活動，カンボジアの歴史や文化の理解のための英語の勉強会や子供たちとの交流のための準備活動を実施した。研修は，主に2つの小学校の訪問と交流，郊外の巡回診療視察，アンコール小児病院見学，トレンサップ湖の水上生活の見学，CVSGジャックフルーツ園の見学と植樹を行った。今回の研修では，医療のことがわかる通訳の同行を加えたことにより，現在のカンボジアの疾患状況やその原因，小児医療の課題などを理解することにつながった。学内活動やツアーを通して，カンボジアの生活や医療状況の現状を知ることができ，学生は開発途上国医療・生活・文化から学びを得ることができた。

（キーワード）看護学生の国際交流，カンボジア，開発途上国，国際貢献

はじめに

「カンボジア・スタディツアー」は，学生の国際交流・国際貢献活動のひとつとして，2005年度より毎年開催しており，2015年度で11回目となった。先進国であるアメリカ，オーストラリアと，開発途上国であるカンボジアへの海外研修は，2010年度から学部教育として単位化し「国際交流活動」という選択科目としてカリキュラム上の特徴的な科目となった。

「カンボジア・スタディツアー」の過去10年間の成果については，谷野[1)]がまとめているように，学生がスタディツアーを通して「国際協力とは何か」や「私たちにできること」を考えることで，学生の幅広い視野を育成するための一助となっていることが明らかである。

今回のスタディツアーでも同様に，開発途上国の生活や医療状況の現状を知ること，カンボジアの文化や歴史から多様な価値観を養うことを目的にカンボジア・スタディツアーを実施したので報告する。

Ⅰ．活動概要

1．研修の目的

カンボジア・スタディツアーは，新見公立大学・短期大学の国際交流活動の一環として毎年企画・実施されている。国際交流体験をとおして，さまざまな国の文化や歴史，医療状況などを学び，多様な価値観への柔軟な思考を養うことを目的としている。看護学部では，国際交流活動の授業科目の中に位置づけされており，カンボジア・スタディツアーを通して，開発途上国の生活や人々の暮らし，健康上の問題などを学ぶことをねらいとして実施した。

2．カンボジア・スタディツアー日程（表１）

2016年１月５日～９日の５日間

3．研修参加者

看護学部１年１名，２年６名，３年１名（男子学生）の学生８名，教員２名，卒業生１名の11名である。

表１　2015 年度 カンボジア・スタディツアー日程表

月日曜	発着滞在地	日　程
2016年 1／5 （火）	関西空港 関西空港発 ホチミン着 ホチミン発 シェムリアップ着	関西空港４Ｆ国際線出発ロビー集合 空路、ホチミンへ 乗り継いで、カンボジアへ 入国手続きの後、ホテルへ ホテルにて夕食とブリーフィング　（シェムリアップ　泊）
1／6 （水）	シェムリアップ	郊外の小学校訪問・交流（コクチャン小学校） 街中の小学校訪問・交流（フンセン小学校） トンレサップ湖見学 オールドマーケット散策 アプサラダンスを観賞しながらの夕食　（シェムリアップ　泊）
1／7 （木）	シェムリアップ	キリングフィールド、アキラ地雷博物館見学 CVSG ジャックフルーツ農園見学・植樹 郊外の巡回医療視察（通訳同行） アンコール小児病院（一部のみ視察可） アンコール小児医療ビジターセンター訪問 夕食は影絵ショー観賞付き 夕食後、ナイトマーケット散策　（シェムリアップ　泊）
1／8 （金）	シェムリアップ シェムリアップ発 ハノイ着	アンコールワットサンライズツアー アンコール・トム、タ・プロム見学 アンコールワット見学 ホテルで休憩ののち、チェックアウト バーストリートにてカンボジア料理の夕食 空路、ハノイへ 乗り継いで
1／9 （土）	ハノイ発 関西空港着	空路、帰国の途へ　（機内　泊） 着後、入国手続きの後、解散

*連絡先：山本智恵子　新見公立大学看護学部　718-8585　新見市西方1263-2

Ⅱ．学内活動

2015年７月下旬より新見公立大学・短期大学の全学科に対し，「カンボジア・スタディツアー」の参加者の募集を始めた。11月上旬よりスタディツアーに興味がある学生を対象にカンボジア会を開催し，ツアーまでの期間で学内活動を行った。

１．カンボジアに関する勉強会の開催

11月にスタディツアーに興味がある学生を対象にカンボジアに関する勉強会を3回開催した。勉強会の参加者は，延べ25名であった。

１）第1回（2015年11月2日）

参加者は，看護学科学生1年生4名，2年生4名，教員3名の計11名。内容は，前年度のツアー参加者による2014年度カンボジア・スタディツアー報告，カンボジアについて国土，宗教，文化，歴史などが書かれた英文を参加者で訳しながらカンボジアについて理解を深めた。

２）第2回（2015年11月5日）

参加者は，幼児教育学科1年生2名，教員1名の計3名。幼児教育学科の学生は，看護学科と同じ時間で開催できなかったため，時間を別に設けて開催した。前年度ツアーを引率した教員による報告を聞いた。

３）第3回（2015年11月12日）

参加者は，看護学科学生1年生3名，2年生4名，教員3名，学長の計11名。第1回に引き続きカンボジアについて理解する英文勉強会を行った。また，当大学図書館に所蔵されている「Cambodia : A Journey through the Land of the Khmer / Kraig Lieb, Tom Vater」[2)]を活用し，カンボジアの文化や歴史について写真を見ながらカンボジアの理解を深める勉強会を行った。

２．寄付活動

ツアー会社の担当者に，訪問予定の現地小学校で不足しているものの情報収集を依頼した。不足しているものは，フンセン小学校では主にノート，鉛筆，青ボールペンであった。郊外のコクチャン小学校では文房具すべて不足している状況であった。カンボジアでは，青ボールペンが公的文書で使用されることもあり，ノート，鉛筆，ボールペン（主に青）の寄付活動をすることとした。

2015年12月1日～18日の期間で，学内に寄付を募るポスター，学内5か所に寄付物品を入れる箱を設置し，ツアー参加学生８名が中心となり，寄付物品の収集を行った。その結果，善意ある品物が多く集まった。ツアー参加予定の学生を中心に，使用可能なものかの確認や仕分けを行った。仕分けした文房具を参加学生８名と教員２名それぞれ４～５kg，合計で約50kgをカンボジアに持っていくこととなった。多くの寄付が集まったため，持参できなかったものは大学内に保管し，次年度の活動に活用することとした。

３．現地小学校での子供たちとの交流のための事前準備

ツアーで企画されている郊外のコクチャン小学校での子供たちとの交流の企画・運営について参加学生で検討した。日本を理解してもらう企画として，「日本のお正月とおせち」を紹介するためのポスター作成を行った。また，日本の遊びを紹介して一緒に小学校の子供と遊びを通して交流を深めるために，「こま，けん玉，お手玉，風船，紙飛行機，大縄」の遊びができるよう準備を行った。「こま」は牛乳パックを丸く切り，爪楊枝をさして遊べるよう，子供たち自身が作って遊ぶ用意した。「お手玉」は中に米を入れ，学生たち手作りのお手玉を作成した。

Ⅲ．研修内容と学生の学び

１．主な研修内容について

１）小学校訪問と交流

2つの小学校には寄付活動で集めた文房具を学生一人ひとりから校長先生へ手渡すことができた。（写真１）

写真１　小学校へ文房具等の寄付

コクチャン小学校は，1982年に開学したシェムリアップの郊外にある小学校である。児童は417人が在籍しており，午前と午後の2部制で運営していた。訪問は午前中であったため，ほとんどが低学年の児童であり，約200人の児童と屋外で交流活動を行った。子供たちはほとんどが裸足であり，服も清潔とは言えず，カンボジアは乾期であったこともあり，校庭の砂埃が舞い上がる中での交流活動となった。

学生は「日本の正月とおせち」の紹介をポスターで行い，通訳にクメール語で訳してもらいながら紹介を行った。その後，日本の遊びの「こま，けん玉，お手玉，風船，紙飛行機」を実演し，校庭5か所のブースに分かれ子供たちと一緒に交流した。５ブースに分かれたが通訳は１人であり，低学年の児童は英語も全く通じなかったため，身振り手振りで交流していた。

午後から訪問したシェムリアップの街中の小学校であるフンセン小学校は，校庭も舗装されており，郊外の小学校とは様子が違っていた。小学生の制服姿の身なりはきれいで，校内にジュースやお菓子の売店もあり，裕福な生活が垣間見えた。小学校の児童は約1200人，1クラス40人であった。当初の予定では見学のみであったが，休憩時間に急遽，交流時間が設定された。特に準備はしていなかったが，学生と小学生とのじゃんけん大会を行った後，互いに歌のプレゼントをし，交流ができた。

学生は，言葉は通じなかったものの，身振り手振りでコミュニケーションをとる努力をし，夢中になって子供たちが遊んでくれる姿を見て，『子供たちのキラキラした笑顔がとても印象に残っていて，私たちがとても元気をもらったように感じる』『言葉は通じなくても，遊び，笑顔を通して，日本とは違う学校生活・環境を知ることができ，自分がすごく日本だけの価値観を持っていたことに気づいた』，『女性の教師が多く，優秀な教師を探すのが大変だという実情も知った』などの学びを得ていた。

2）トレンサップ湖見学

東南アジア最大の湖のトレンサップ湖の水上生活を見学した。水上に病院，学校，商店などすべてがあり，ここに暮らす人々は湖を漂いながら生活している。乾期と雨期では，水位がかなり違うが，このツアーの時期は乾期で，水位が低い時期であった。湖の水はかなり濁っており，茶色や藻の影響か赤や緑に見える場所もあった。ガイドよると，水上に暮らす人々の排泄，お風呂すべて湖で行い，湖の魚でタンパク質を取り，生活のすべてがこの湖でなされているようであった。水辺は，子供たちの遊び場にもなっていた。

学生は，『正直，湖の色に驚いた。湖と聞いて思いつくのは，青く透明なきれいな水を考えていたが，茶色く何も見えず，コーヒー牛乳のような印象だった』，『トイレも現地の人は直接湖に流していると聞いたが，子供たちが平気で水遊びをしていた光景が印象的だった。衛生的な問題はどうなのかがとても気になった』と看護職としての視点をもち見学していた。

3）CVSGジャックフルーツ園見学・植樹

カンボジアで活動するNGO団体のカンボジアの村を支援する会（NGO CVSG JAPAN）が行っている事業のひとつにジャックフルーツ園プロジェクトがある。この事業は，カンボジアで人気の高価な果物であるジャックフルーツを植樹し，現地の人が実った果実を売って，生活基盤を作るための活動である[3)]。広大な土地に様々な野菜や果樹が植えてあり，30ヘクタールの農園を30家族で管理している。学生は，ジャックフルーツの苗木の植樹と水やりを行った。植樹したところから離れた場所にある井戸水を汲み上げ，バケツで水を運んだ。日本では水に不便のない生活であり，水に苦労のある現実を見て学生たちは驚きを隠せない様子であった。

学生は，『広大な土地を少ない人数で管理していてすごい』や『水などもすべて自分で汲んで，たいへんだった』と現地の方々の苦労を感じ，『他のフルーツに比べて育てやすいジャックフルーツを植樹することによって生活を援助することができているように思う』と植樹が生活支援のひとつになっている実感をもっていた。

4）郊外の巡回診療視察

CVSGの支援で現地の巡回診療を行っている医師に同行した。医師の話によると，カンボジアの平均寿命が10年前は50歳代であったが，近年は60歳代となり，国全体では寿命が延びている。郊外では近年アルコールの飲みすぎで肝臓疾患にかかる人が増えている。郊外では農家の患者が多く，関節痛を訴える人が多い。貧困のため，栄養が足りない人も多いなどの課題が山積しているようであった。

実際の巡回診療は，3か所訪問した。2か所は民家で暮らす患者で，医師が来るのを心待ちにしている様子が伺えた。同時にカンボジア郊外の生活を垣間見ることができた。巻き上がる赤土の土埃で，道路わきの木々も土色であった。点在する家々は，屋根と柱と少しの板壁の高床式の建物で，一部屋の中に，粗末なかまどや食器，一角に敷物を敷いて寝るスペースがあるといった簡素なものだった。3か所目は，カンボジアの伝統的な病院に訪問した。（写真2）病院といっても野外であり，一角に患者が集まる憩いの場のようなスペースだった。ここでは「薬草」や「まじない」など，カンボジア伝統的な治療方法を受けるために生活する施設であった。

一人の女性患者は，膝関節炎で，膝関節に湿布を貼用していた。その湿布は，5種類の薬草をつぶしたものに子供の尿をかけたものであった。その方は，病院にも行ったが，病院の入院費が高いこともあり，3か月前からこの伝統的

写真2　巡回診療の様子

な治療を受けていた。若い青年は，皮膚の病気で入院していた。カンボジアではこの伝統的な治療も信じられており，貧しい人々はここを頼っている様子であり，巡回診療で医師も訪問し，共同で治療している様子が伺えた。

学生は，『少し街を離れると貧しい村の様子がよくわかった』，『巡回診療へ行って，田舎に住んでいてなかなか病院まで診察してもらいに行けない人々の様子を見た』，『村の人たちにとって巡回診療が果たす役割はとても大きく，医者が訪問するとみなさん喜んでいる姿が印象的だった』，『薬草やおまじないのようなものを使った医療も行われていて，日本との違いを感じた』など，郊外に暮らす人々の生活や病を抱える人々の日常を見て，日本との違いを感じていた。

写真３　アンコール小児病院訪問

５）アンコール小児病院見学（写真3）

シェムリアップ市内にあるアンコール小児病院は，1999年にNPO法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーが設立した小児病院である[4)]。2013年には病院が自立し，「カンボジア人によるカンボジア人のための病院」として再スタートし，2年が経過していた。病院全体の見学をした。訪問した日は，カンボジアの祝日であったが，300人の外来患者であった。普段は約700人の子供たちが外来受診をする。カンボジアでは16歳までは医療費は無料であるが，病院に来るために寄付を募りやってくる親子，17時で閉まるので次の日の診察まで待つために屋外で泊まる人もいるため蚊帳を貸し出したり，帰るお金がない人にはタクシー代を病院が払ったりするなど日本では考えられない現実があった。待合室は，屋外であり，受付後トリアージナースがいるバイタルサインルームで問診を行っていた。施設内には，ICU，NICU，EMRGENCY ROOM，MINOR PROCEDURE ROOM，手術室，一般病棟，リハビリテーションルーム，ソーシャルワークUNITなど日本の病院とあまり変わらない施設であった。しかし，病室内を見ると大きな部屋にいくつものベッドが並べられており，そのベッド間隔は狭く，日本の病院とは大きく異なっていた。また，病室の天井は高く，照明器具はあるが十分な照度ではなかった。一般病棟は窓も開け放たれ，空調設備はないことが見てとれた。

学生は，『小児病院では，カンボジアの中でも有数の大きな病院で設備も予想しているより整っていた』や『クーラーが効いていて，部屋も日本みたいに大部屋や個室などに分けられていると勝手に日本の価値観だけで考えていた』，『畑などがあり，食事も親が作るということで外にキッチンがあり，日本とは違うところをたくさん知ることができた』など，見学前に考えていたカンボジアの病院のイメージとの違いを感じていた。『退院後の生活の確認が取れているわけではなかった』という課題を感じた学生もいた。

６）カンボジアの歴史と文化に触れる

スタディツアーの企画の中には，カンボジアの今だけでなく，文化や歴史を学ぶ内容も盛り込んだ。古代では，アンコールワット遺跡群の見学，近現代ではクメールルージュの悲しい歴史をアキラ地雷博物館，キリングフィールドの見学で学んだ。これらについては，事前学習のカンボジア会で写真を見たり，文献を読んだりする中である程度の知識を得ていた。しかし，実際のアンコールワット遺跡群の圧倒的な光景や，地雷博物館，キリングフィールドでの生々しい資料は，迫力をもって学生たちに迫ってきたようであった。特に今回の通訳者は，父親がクメールルージュに参加しなければ自分が殺される切迫した状況におかれた話を伝えてくれた。歴史の複雑な流れや一面だけの価値観では，一人一人を理解することは難しいことも教えられた。

２．スタディツアー全体を通して看護学生としての学び

今回のスタディツアーでは，巡回診療や小児病院見学があった3日目に医療のことがわかる通訳の同行があった。そのため，巡回診療の医師の話や小児病院の見学では，クメール語の医療用語を通訳してもらえたため，医師や病院関係者の話が理解でき，学びの多い1日とすることができた。看護学生としての学びを以下に示す。

・日本とカンボジアを比べて，気候・食事・住居・仕事・医療すべてが違い，これらの生活背景があるから，それぞれの国の問題・病気があるということが分かった。
・日本は裕福な生活であり，生活習慣病などが問題となっているが，カンボジアは十分な食事もなく，カルシウムが不足していることにより，関節痛などが多いことを知った。いかに生活が身体に影響を与えているかということを改めて感じた。
・今まで日本のことしか考えたことがなかったけど，これから国際的な生活背景，医療体制について学んでいきたいと感じた。

・教育や医療や衛生面など日本では想像できないような環境があった。日本では飲用できる綺麗な水道水が流れ，石鹸があり，清潔なタオルがあり，幼いころから食事の前やトイレの後などは手を洗うように指導されるという環境が整っている。それが当たり前で重要性もそこまで感じてこなかったが，実は「手を洗う」という基本的な行動がとても大切なことだと実感した。小児病院でも手洗いの指導を地域の子どもに行っていて，保健指導や衛生教育の必要性，重要性を学んだ。

Ⅳ．研修後活動

スタディツアー終了後，各活動での学びや看護学生として感じたこと，ツアーを通しての感想，ツアーや勉強会の今後の課題について参加学生個々でまとめ，ツアーの振り返りを行った。各自まとめた学びを持ち寄り，学生がカンボジア・スタディツアー報告のポスターを作成し，大学のイベント等で展示したり，2016年度のカンボジア会でプレゼンテーションし，自分たちの体験や学びを発信する活動を行っている。

Ⅴ．まとめ

今回のスタディツアーは，昨年度と同様の研修内容に加え，医療のことがわかる通訳の同行を依頼できた。そのことにより，現在のカンボジアの疾患状況やその原因，小児医療の課題などを理解し，感じることができる研修になった。研修後の学生アンケートの学びから，国際交流活動の授業科目ねらいである開発途上国の生活や人々の暮らし，健康上の問題などを学ぶことができたと評価できる。また，事前の学内活動でカンボジアの文化や歴史を学習したことや実際のカンボジアの人々の生活に触れ，遺跡巡りでガイドからの説明を聞く中で，開発途上であるカンボジアの理解につながり，日本との生活の違いや平和の尊さを実感していた。事前の学内活動を含めて今回のスタディツアーでは，多様な価値観への柔軟な思考を養うことにつながっていると考える。

今後の課題として参加学生より挙げられたのが，クメール語でのあいさつや自己紹介ができるように準備しておくことであった。学生は英語が少しは通じると思っていたこともあり，クメール語について事前に勉強する機会を設けていなかったため，準備不足であったと考える。今後は事前のカンボジア会活動で，クメール語の学習を取り入れることも必要だと考える。

文献

1）谷野宏美：新見公立大学カンボジア会 10年間の活動報告.インターナショナルnursing care research, 14（4）, 135-141, 2015.
インターナショナルNursing Care Research研究会

2）Kraig Lieb, Tom Vater：Cambodia：A Journey through the Land of the Khmer／ Kraig Lieb, Tom Vater. Purple Moon Publications,2014.

3）CVSG公式ホームページ［インターネットOn line］,［2016年9月］,
http://www.geocities.jp/cvsgjapan/7.jyakkufurutu.htm

4）特定非営利活動法人 フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANホームページ［インターネットOn line］,［2016年9月］,http://www.fwab.jp/activity/ahc